
虹を越えるホームラン！

Tsujisawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹を越えるホームラン！

【Nコード】

N2019F

【作者名】

Tsujisawa

【あらすじ】

今年も暑い夏がやってきた。僕らの夏はいつまでも同じように進んでいる。しかし、今年は何かありそうな気がする。停滞している僕の毎日を吹き飛ばすかのような、うだる暑い夏の日。どこかで賑やかな声がきこえてくる。

0 s t r i k e 0 b a l l

暑い夏、うだる夏。

蝉が空を覆いつくし、新緑の若葉たちが帆を真緑に染める。
海に呼ばれる人がいる。甘い一時に身を投じる人がいる。そして
受験生にとっては天王山。

夏。

じりじりと焦げるような陽射し。扇風機が毎夜登板する家。
毎年それは繰り返されてきた、一種の儀式だ。

そんな。季節の片隅で。

額に浮かぶ汗、弾け飛ぶ歓声。

だんだんとボルテージの上がる球場と、繰り広げられる駆け引き。
そして土煙の舞い起こり、声援が飛ぶ。

そのスポーツの正体こそ、野球。

簡単なルール、打つ、走る、投げる。

その単純明快なプレイが、時に人を揺れ動かして、行動を起こさ
せたり、手汗を握らせる。

ただ、その僅か一球に人生をかけるために。陽の当たる場所を目
指している。

どんな人間でも、子どもに戻るタイムマシン。野球。

世界の認知度でこそ、マイナーなスポーツでこそあれ、サッカー
を追い越すほど盛んな国だってたくさんある。

野球は、青春を謳歌している人たちだけのスポーツじゃない。年
齢差を物ともしない、全国の野球児たちがそこには立っている。

デスクワーク疲れの痩せ球児。ビール腹のドデカイ球児。みんな

それは一つに繋がっているから。

野球というスポーツを介したボールパークで。観客もコーチも監督も、そして主役の選手たち。

その季節にはいつも汗と努力。そして感動がある。

額に浮かぶ汗、弾け飛ぶ歓声。

だんだんとボルテージの上がる球場と、繰り広げられる駆け引き。そしてその中心でいつも輝いているもの。

白球。

綺麗な。彼らの運命を乗せるボール。

糸目が縫われていて、一見小汚いイメージがある。

しかし、それこそが未来で。みんなが掴もうと汗水をつぎ込んでいく。

それに魅せられた者たちが。追いかけて、飛び跳ねて、そして歓喜、悲鳴を上げる。

皆好きなんだ。どうしようもなく野球が。

だから集まる。だから懲りもせず、しようもなく野球をする。

エースと呼ばれる人間が居る。主砲と呼ばれる人間が居る。

それがなんだ。ただの称号でしかないだろ。彼らだけじゃないんだ。野球にかける人たちは。

打順もポジションも。全ての力が結束してドデカイ車が動く。相手にドデカイ戦車を見せ付ける。

それは確かに剛速球や、アーチと呼ばれる。固有の美しさもあるかもしれない。

でも、それを際立たせているのは誰なの？

ああ。そんなものは簡単すぎて答える気にもなれない。

野球バカたちがあつまる場所。

生息地は球場。活動時間は陽の昇るその時間。

もちろん。日曜日にもなれば、どんなにボロくさい市営球場にだってバカたちは押し寄せてくる。

僕は、入り口に立っていた。

真っ白の帽子、純白のユニフォーム。黒のベルトに首からかける小さなネックレス。

片手に持つのは茶色の木製バット。もう片方にはコルク色のグラブ。

小さな身体と細い腕。華奢な身体は野球向きとはいえず、それどころか慢性的な病弱な身体は、大半の人は気の毒に感じるんだろう。

それでも立派な野球人だ。僕は野球人なんだから。道にはずっと野球が敷き詰められてるから。

理由なんてそれで充分。だから打つ、投げる、走る。時にはスライディングだってする。クロスプレーだって恐れず突っ込んでいく。野球　いつでもどこでも野球。

道は遠い。ずっとずっとその先の向こうにある。

四つのベースで作るダイヤモンド。てらてらと輝いているグラウンド。敷き詰められた黒土。芝生に覆われた外野。

故郷なのだろう。土のおいと白のプレート。

ホームベースには程よく土が舞い、こびりつく黒土。

「か、監督！？　ヤツです！　あの噂の……ヤツが！」

「なに！？　ま、まさか各地の野球場に出没するという……」

阿鼻叫喚の声で言い寄る男。眉毛の太い、中年の男性だ。もう一方の男はお世辞にも、痩せているとは言えない、中年腹の男。なに

やら男二人が筒抜けの密談をしている。

一人はサングラスをつけて、中年腹をしたオジさん。もう一人は頭のアレが物寂しい中年のオジさんだった。

「キ、キング！！ 今から代打で出てくれませんか！？」

本当に切羽詰っている声だった。

お願い……と言うよりも、最早懇願していると表現した方がいいかも知れなかった。

「今、最終回のツーアウト満塁なんです！ 一点でもいいですから、代打してもらえないですか？」

「僕はいつからキングになったの？」

もうだいぶ前、いつのまにかいろんなチームに顔を覚えられて、なぜか僕はキングと呼ばれている。

「あなたがキングじゃなかったら、誰がキングですか。とにかく打席に行ってくださいよ」

「難しい。3 6 だったら負け……」

それに七回ツーアウト満塁。僕が凡退なんかしたら、それこそ重たいムードの纏わされて冷たい目で見られるに違いない。……………

代打なんかダメ。

「キングがそんな弱気でどうするんですか！？ そう言わないで代打してください」

「最後の打者くらい自分のチームで出してくださいよ……」

「いや、私たちはキングの雄姿が見たいんですよ……」

「無理ですよ、普通に考えてください。これで負けてしまったら、僕がさびしくなります」

「キングが凡退するワケないじゃないですか！ ではでは、頼みますよ！」

バシッと背中を押される。チラリとベンチを盗み見してみると、監督らしき人が勝手に僕の代打を告げていた。……状況はかなりまずかった。

「ち……巷のホームランキング……」

「音楽寺の機関銃……」

「満塁じゃなきゃ敬遠するんだが……」

口々に相手チームは僕を警戒して、マウンドでなにやら秘密会議している。

「……………はあ。いいよ、もうなんでも」

誤解を解く必要時間を考えると憂鬱なので、もう僕の誤ったイメージを正すようなことはしない。

それなら、さっさと敬遠してくれるかもしれない。

僕は持参の茶色アオダモバット『金剛地君2号』を二、三回ぶんぶん素振りした。

ブォーンと小さな風を切る音がして、土が舞い散り、ジャリ…と土を踏み締める。

「じゃあ

行ってきます」

0 s t r i k e 1 b a l l

ガラリと戸に手をかけて、そのまま引き戸を開け放つ。そうすれば引き戸は割と重々しい音を立ててすぐに開いた。

「……ただいま」

埃のにおいをする畳六畳。

誰もいない。寂れた長屋に僕の声が響いた。

僕は返事が返ってこないのを確認してから、無人の家に転がり込んだ。

布団は干し忘れたから、居間の真ん中に転がったまま。包丁は研ぐのを忘れたから、汚れがついたまま。掃除はし忘れたから、部屋は汚いまま。

何ヶ月忘れてるだろうか。そろそろしないといけないとは分かっているが、やっぱりいざとなると億劫になる。

……せつかくだから、あともう少しだけ忘れたままでいよう。

「あら……、帰ってたのね。今日はどうだったの？」

サッパリと短髪で、色黒の女の子が僕を見据えていた。

僕は相手がその見慣れた女の子だということを知っていたから、金剛君2号のバットを磨きながら答えた。

「……なんとか打てたよ、マグレだったけどね」

「今日も打ったんだ……。相変わらず野球だけは得意ねえ……」

女の子は呆れ返っている。

「得意じゃないよ。宝くじのような可能性が当たっているだけなんだから……」

「現在進行形の宝くじは実力って言うの。偶然もあるかもしれないけど、ほとんどはあんたの力でしょ」

「こんなに細い体と腕で打てるわけない」

「それでもあんたは打ってる。しゃんとしなさい」

バンと僕の背中を叩いて、そのままキッチンにまで歩いていく。

「そっちにはなにもないよ」

「良介」

「どうしたの？」

僕の名前で呼ばれるのは珍しいなと振り返る。

「今日くらいあんたのゴハン作ってあげるわ。きつとロクな物食べないでしようしね」

ぐぐつと腕まくりして、彼女は料理なら何でも作ってしまいそうな雰囲気醸し出してきた。

「由美が僕のゴハン作るなんてめずらしいね」

なので、僕は素直に言った。昔は由美のゴハンをご馳走してもらったことはあったが、ここ数年はそれもほとんどなかった。僕は就職しているし、由美は大学生。会うこと自体そんなに多くはない。

「たまたまよ。今日も打てたみたいだし、まあ今日くらいは特別に作ってあげようと思っただけよ」

「じゃあ……炒飯」

「バカ、卵無いのにどうやって作るのよ。適当に作ってあげるから、しばらく待ってなさい」

「分かった」

僕はスポーツ番組にチャンネルを合わせた。

夏の暑い日。外に置いてあった温度計は地熱で振り切れ、水銀も熱中症状態だった。

その中で僕は、脱水症状気味な身体を起こしていた。
行く場所があったのだ。

着替えて目的の場所へやってくる。ここは見違えるように涼しい。
大きな県立病院に僕は立っていた。

僕が怪我をしたわけじゃない。ただ少しここに用があるから、いつも寄っている場所だ。

僕は大きく深呼吸してから、ドアを開いた。

「……こんにちは」

中に看護婦さんがいたので、僕はあいさつをする。

看護婦さんは僕の姿を認めると、笑顔を作る。

「おはようございます。今日も早いですね」

看護婦さんは花瓶に入れてある萎れた花を交換していた。

たしか……僕は何日か前にも同じ光景を目撃していたと思う。

「村松さんはいつも早いですね。僕は起きる時間が遅いので……」

「いえいえ、こんなに朝早く患者さんのお見舞いに来る人は数えるほどなんです。けっこう大きな病院なんですけど、以外に空いてますから……」

シャア……とカーテンのヴェールを引き払って、太陽の光は病室をみたしてくる。その光に遅れるように、ぽかぽかの陽気がすぐに病室に差し込んでくる。

「季節は……夏……なんですねえ。私みたいに、病室勤務だと、こういう季節感がなくなってます……」

「この暑さだけには参りますけど……」

ここは涼しくても、外は地獄のような炎天下が待っているのだ。
地球温暖化の影響なのかは分からないけど、じとつと纏わりつく
ような熱気が今年にはある。

「プールとか海はいいかもしれませんがね。年を取った私なんかは紫外線対策をしなければいけないですけど、宏平さんは水着一つでどこにだって行けますよ」

「僕がそんなところに行っても溺れてしまっただけです。泳ぐのは苦手です、ずっと浮き輪で浮く羽目になってしまいます」

「……はは。やっぱり良介さんは野球ですね」

しみじみ看護婦さんが言った。僕は曖昧に受け答えして、パイプ椅子に腰掛けた。

「今年も甲子園が始まりましたね」

「……甲子園ですか」

僕はポツリとつぶやいた。けれどその響きは、僕の心で恐ろしいほど冷めたひびき。

「大阪東方高校の田中くんが通算ホームランの記録を伸ばしたとか。野球はあまり詳しくは知らないんですが、高校野球は好きです」

村松さんはしばらく黙りこくって、考えてから話した。

「高校野球は好きですか？」

「……嫌い……だと思っ」

ワケはあった。ただ僕は目を逸らしたいただけなのだ。

『さあ、ここで四番の神谷良介くんを迎えるわけですが、どうすれば抑えられますか？』

ラジオが状況を刻々と伝える。

実況を担当している男性は興奮気味に言葉を並べ立て、解説者に意見を求めている。

『うつむ。ここはやはり外中心で攻めて、四球は仕方ないと割り切るしかないでしょう』

解説者も手に汗握っているような口調だった。ラジオからはワーワーと大勢の観客による雑音がすごい音量で聞こえてくる。

『現在試合は最大の山場を迎えております。現在は七回の裏、並木高校の攻撃中、ランナーはツアアウト三塁、4 4の両者全くのドロースコア！ しかし、先発の柳選手がこの回突然の乱調。二

つの四球を与えながらも周りの攻守に助けられ、現在の状況となっております。しかしここで立ちふさがるは並木高校最強の四番。神谷良介くんを迎えております！ 試合はこの勝負で決まるかも

しません！』

『おおっ！ 捕手は内角を構えていますよ！』

解説者は非常に驚いた様子で切迫した状況を伝える。

夏の日。そこには白球があつて、黒のグラウンドがあつた。

バットとグラブがあり、グラウンドを駆け抜ける十八の選手。

『あー！ 打球は大きく舞いあがつたあ！ これは文句なし！ 文句なしのホームランです！』

高校野球界に突如現れた新星、神谷。ここでもホームランを打ち

ました！』

実況はもう倒れんばかり叫びようだった。

それはどこかの回想録のように、録音されていた一部。

僕、神谷良介の放ったホームラン。

それは試合の趨勢を決めたホームランだった。しかし。

まさかこれが僕の人生を狂わす、最高のホームランになるなんて。

結論から言うと、僕は女性を傷つけた。

僕は野球をしていた。一時期は地元の星なんてもてはやされたこともあった。

僕はホームランを打った。会心の当たりだった。打球は大きな放物線を描き、客席に飛び込んだ。

大歓声が轟き、僕は仰々しくも天に向かってガッツポーズをし、点数の刻まれたスコアボードに向かって吼えた。大逆転の幕開けに相応しい、そうそうたる一打になればいいと思った。

僕は野球が大好きだった。

試合が終わった後、コトの顛末を聞かされるまでは。

『ホームランボールが女性に当たったぞ！』

『頭か！？ 早く救急車を呼べ！』

『急げ急げ！』

試合の裏では大変な出来事になってしまったらしい。

僕は病室で最悪の事実を聞かされた。

「彼女の頭にボールが直撃したことで、手足に麻痺が確認されます。時間と共に回復していくでしょうが、もしかしたら後遺症が残るかもしれません」

医師の診察は残酷だった。

ホームランは僕から野球を奪い去った。ただ、御幣があるかも知れないから訂正しておくが、僕は自らバットを置いた。もう野球はできなかった。打席に入る度に手が震えた。歯がカチカチ鳴った。

た。心臓が痛かった。野球とは娯楽のスポーツであり、『狂気』。そんな考えが僕の頭の中を支配して、スイングを拒んだ。

それはスポーツ選手特有の病気の一種だった。呪った。しかし安堵した。

僕には野球はできないのか。いや、しかなかったのだらうと。もう嫌な思いはしたくないと思ったのだらう。

僕の記憶には、こんなにも野球とは過去の物だとインプットされているのだから。

「起きてたんだ。言ってくればさっさと帰ったのに……」

僕は本心からそう言った。

「いいですよ。帰らなくても」

眠っていた女の子はいつの間にか目を覚ましていた。その瞳は僕を恨みがましい目で捉えていた。

冷やかな目と、僕に対する侮蔑の目。少なくとも僕にはそう映った。

彼女は三年前に僕のホームランで頭部を強打し、以来全く左手が右足が動かない。

しかし、最近はりハビリの効果もあつてか、右足に関してはかなり状態がよくなってきた。短距離であれば、歩くことも出来るようになってきた。

「最近の調子はどうですか？」

「どうって……。そのままですよ」

女の子はぶっきらぼうに僕の質問に返答する。

「……そう言われると、僕が何も言えないじゃないか」

「何も言わなくてもいいんですよ」

僕がいるため、彼女はたいそう機嫌が悪かった。

「……もう、寝ます」

起きたばかりだろうに。そんな突っ込みをしてしまいそうになったが、暗に帰れと告げられている気がして、僕はその空気を読むことにする。

「じゃあ、また来るよ」

「今日はちょっと機嫌が悪いみたいです」

病室を出て、看護婦の村松さんと入れ違いになった。村松さんは複雑そうな微笑みを浮かべながらも、僕を気遣ってくれているようだった。

「そんな感じはしました。帰っていいとも言われましたし、今日はこれでお暇しようと思います」

「はい、朝早くから毎日のように、本当にありがとうございます。なんだかんだ言っても、悠樹さんは良介さんの話をよくしますから……」

「はは。愚痴なら聞いてあげたいんですけど、本人に聞かせたら意味ないですから」

「いえいえ、お気にならないでください」

そう嫌でもないのだろうか、村松さんは笑顔を作ってくれた。僕自身の愚痴を聞く。これだけは僕に出来ない役割だろう。

「彼女はもうとくに良介さんのことは許されてるんですよ。あとは良介さん次第だと思います」

「……はは。そうですね」

僕は、暑苦しい大気に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2019f/>

虹を越えるホームラン！

2010年10月28日00時43分発行